

山田利博著 『源氏物語の構造研究』

加藤 昌 嘉

「これからは、個人的な知りあいの本の書評を義理で引き受けしてしまった時に、激賞の書評だけを書くことにしようかと思つている。」とは、金井美恵子の言葉なのですけれども（本を書く人読まぬ人とかくこの世はままならぬ Part II）、この書評もつまりはそれに近いと言えなくもありません。「源氏」の研究論文など滅多に読まない私が敢えてこの書評を引き受けたのは、学生時分に追いかけた山田氏の論稿が一書に纏められたことを慶賀し、これを世に称揚したいという気持を禁じ得なかつたからに他なりません。

さつそく待望の書を開いてみます。本を読むときの悪い癖で、まず目次を眺め、注と索引を一覧し、あとがきを読みます。驚かされるのは、初出時のタイトルが殆ど変更されていることです。

例えば「光源氏相対化の機構」は「夕霧と柏木、そして鬚黒」に、「源氏物語正編の骨格」は「明石一族の力」に改められるなど、一見すると作中人物を表立させるかのような構成となつていきます。しかしそうでありながら、「旧来の研究がはまつてきた陥穽は」「作中人物をあたかも実在するかのように扱つてきたこと」という記述があるように、山田氏の諸論稿は、凡百のいわゆる人

物論（藤壺は〇〇という性格の女性だといった類の人物談義）とは全く異なる視点から書かれています。

「第1部 人物造型の方法」には九本の論稿が収められています。例えば「花散里の機能」の中には、「すなわち花散里は」「紫上が安定しない状況の時に現れ、その状況を分け持つことによつて紫上の安定を図ることを主要な任務として造型された人物で」「うかつに出すとその存在が前面に出過ぎてしまうので、常に目立たぬよう規制を掛けられている」という発言があり、これが、作中人物論ではなく、単なる花散里論でさえなく、立派なドラマトゥルギー分析になつていて感得させられます。その他、第1部の各節には、「六条御息所の機能」「秋好の機能」「葵上の機能」といった題名が付されていますが、いずれも、目指すところは、「源氏」というフィクションの中で作中人物がどのような歯車となつて働いているか」という問題の解明にある、と見るべきでしょう。

その第1部「第3章 薫の造型」には、実にスリリングな三つの宇治十帖論が収められています。「負性を帯びた主人公として」（初出時「薫の墮落」というタイトルで論議を醸しました）は、宿木巻から夢浮橋巻にかけて薫の超越性が解体されてゆく過程を辿りつつ、そうして失墜化してゆく薫の軌跡こそが宇治十帖の骨格となつていてと説くもの。続く「物怪としての薫、そして匂宮」（初出時「薫・匂、分身論の試み」という副題が付いていました）は、薫と匂宮が物怪的な性質を担つているという新見を呈示し、その役目が東屋巻あたりで薫から匂宮へと移譲されていると説くも

の。続く「薫と匂宮の交錯」(「宿木の屈折」という原題が象徴的でした)は、宿木巻で人物たちが対称に布置されていることを指摘し、この巻が中君物語から浮舟物語への屈折点になっていると捉えたもの。とかく一個の中篇のように纏めて扱われがちな手治十帖ですが、とりわけ宿木・東屋巻の時点にねじれと転回を認める点で、この三論稿は、もはや薫論という枠を超え、ダイナミックな統篇構造論になっていると思われれます。

「第2部 光源氏相対化の構造」には、裏光源氏論とも称すべき、一〇本の論稿が収められています。その第2章「第3節 負性を帯びた主人公・女三の宮」は、実体が空虚であるがゆえに若菜巻の物語を嚮導してゆく女三の宮の存在性について説いたもの。先に紹介した薫論と併せ読めば、「負性」の系譜が正篇から連なっていたことが看取できるでしょう。また、「第4節 玉鬘と落葉宮、そして女三の宮」は、落葉宮と女三宮を、玉鬘の系譜に連なる人物と捉えたもの。もちろんそれは、性格上の類似性云々ということではなく、物語舞台上の機能における謂であることは言うまでもありません。その他、この第2部には、光源氏の周辺部分がどのようにその中心を失墜させてゆくかを解明する論稿が並んでいるのですけれども、興味深いのは、「玉鬘の機能」「夕霧の機能」「朱雀院の機能」といったタイトルと共に、「初瀬と石山の呼応」「男踏歌の対照」という論稿が収められていることです。この二つは、「初瀬」「石山」「男踏歌」の現出の仕方に着目し、その連鎖・対称性から物語の仕組みを捉えようとするもので、つまり、作中人物であっても行事や事物であっても、それ

らは作り手の周到な意図のもとに配置されたフィクション構成の一要素であるということでしょう。人物名が表立った目次になっておりつつも、本書が人物論とは非なるドラマトゥルギー論になっていると言う所以です。ちなみに、本書で、時折、「変なものを紹介して恐縮だが」と言いつつ、大和和紀・牧美也子の漫画や向田邦子の脚本が参照されているのもユニークなところですね。ドラマ化に際してどのように原作をデフォルメしたのかを見ると、「源氏」自身が醜化したもの・語り残したものが逆に照らし出されて来るといっわけ、こうした脱線部分も一つの作劇法分析たり得ている、と言ったら鼻根の引き倒しになりましょうか。

「第3部 テキストの構造」には比較的最近の論稿が収められ、より広い視座から「源氏」の表現技法や物語展開術が考察されています。「第3章 手習歌の機能」として纏められた二論稿は、一人口ずさむ独詠歌と違い、「紙に書かれた」ことで伝達を余儀なくされる手習歌の特質を明らかにし、それが、物語を新たな方向に押し拓く仕掛けになっていることを説いています。就中、浮舟の手習歌がもはや散文部分が担えぬ次元に自立してしまっているという指摘には誰もが瞠目することでしょう。続く「第4章 登場人物と和歌の効用」も「第5章 引歌・引詩文を手がかりとした「引用」の機能」も含め、この第3部の各論は、作中人物のみならず和歌・引歌であっても一単語であっても物語展開の駆動因となっているという発想で物されているようです。本書を第1部から第3部まで読み進めて来ると、人物・事物の機能から、ことばの機能・和歌の機能へ、「源氏」の構造を見据える視点がよ

り高次化しているように感じられます。さらに今後、山田氏がいかなる物語論を展開するのか期待されてやみません。

……以上、私個人の関心による独善的な纏めとなりましたこと、お詫びします。著者の立場と本書の論旨は「序」と「まとめ及び今後の展望」に明快に要約されているので、是非そちらを御覧いただきたいと思います。

それにしても、本書を読み通して、萩原広道「源氏物語評釈」（一八五四・六一刊）の「惣論」を想起したのは、私だけではありませんか。広道は、「主客」「正副」「正対」「反対」「照対・照応」「反復」「首尾」といった概念を以て、作中人物の置かれ方・各巻の繋がり方を鮮やかに解析してみせました。広道の論が形式的な指摘に留まったことは否めませんが、こうした視点は現代でも、篠原昭二氏の各巻分析や池田和臣氏の表現分析に引き継がれていると見受けられます。本書で山田氏が、人物の造型法や表現の連関性を分析する際、「連鎖」「系譜」「類似」「呼応」「対称構造」「交錯」「反転」「引用」といった言葉を用いているのを見るにつけ、広道の分析がさらにダイナミックでマクロな物語構造論へと推し進められたかのような感慨を覚えます。「源氏物語の構造研究」とは、すなわち、どのような構成要素が物語を突き動かしているか、物語はどのように組み立てられているか（逆から言えば、作り手はどのようにフィクションを組み立てたか）という、ドラママトゥルギー分析の謂である、と私は理解しています。今なお

「源氏」研究の世界では、「作者の死」などと嘯き、構想・成立といった言葉をいっさい抛棄する立場がある（そういう論者に限って作り手の術中にはまったまま論を進めていることさえある）ようですが、それだけに、山田氏が、「この問題はつまるところ構想論ということになるう」或いは「これは作者の詭計である可能性が高い」とまで書いている箇所を読むと、やはりそういう点はそのように認めるのが学者として素直で誠実な態度だろうと思えてならないのです。もちろん、作者がそのように仕組んだということ、物語がそういう構造になっているということがどう重なるかについては更なる検討を要するのですが、少くとも山田氏は、自身の目で精緻に物語を読み解き、自身の言葉で諄々とその構造を説き明かしており、「脱構築」だの「カノン」だのといった受け売りの術語を並べる或る種の「源氏」研究と違って、本書の論述の中にはいささかの気取りもごまかしも見当りません。

本書の「あとがき」によると、山田氏は日ごろ学生たちに、「待てよ。何でこんなに面白いんだろう。何とかしてその理由を理解したい」と思うところから研究は始まる。」と説いているようですが、まさしく、本書を読み終えた学徒は、「そうか、この物語が面白いのは、そんな仕掛けが施されていたからか」と驚き、再び自身の足で「源氏物語」に赴くことでしょう。

（二〇〇四年一月 新興社 A5判 四七七頁・索引一六頁 税込二四一八〇円）